少子社会における個人および社会の養育力に関する母子保健学的研究

第三報　「次世代育成に関するアンケート調査」分析と総括

母子保健研究部　宮原　忍・齋藤幸子
竹井　操（東京都幼・小・中・高・身障性教育研究会）
内山絢子（目白大学人文学部）
星山佳治（昭和大学医学部）

要約

少子化を狭義の生殖の問題と考えるだけでは根本的解決に至らないと考え、世代継承の視点から、個人および社会の「養育性-generativity」に注目した。養育性の測定手段として作成した調査票を用い、25～54 歳の男女を調査対象とし、有効回答 635 人について検討した。

EPSI（エリクソン心理社会的段階目録検査 Erikson psychosocial stage inventory）得点の高低２群間の比較を行った結果、エリクソンの理論による人格の成熟度の高い者は次世代を育成する養育力が高いと言えた。その背景として、高得点群は、異世代の人々との交流、成育環境、回避型人格傾向、共感経験で低得点群との間に有意な差が認められ、養育力を高くする因子として、1）成育家庭の雰囲気が自由で開放的・ユーモアがあること、2）両親は価値観が共通し、互いに個性を尊重していたこと、3）同世代・異世代を含む家庭外での多様な人との触れ合い経験が豊富なことがあげられた。すなわち、家庭・地域など再生産領域を占める社会体制の再建こそが、わが国の次世代育成力を高めることに繋がると言える。

見出し語：少子化、養育性、生殖性、EPSI、希望子ども数、世代継承

Studies on the personal and social generativity in the low fertility society
Part 3 : A survey on the attitude toward parenting next generation

Shinobu MIYAHARA, Sachiko SAITO, Misao TAKEI,
Ayako UCHiYAMA, Yoshiharu HOSHIYAMA

Decreased fertility of Japanese society was considered as the problem of the generation succession, and E.H. Erikson's concept of "generativity" was found to be useful to study the problem from this point of view. A list of questionnaire was invented to survey the men and the women of 24~54 years of age. In October 2002, the 635 effective answer sheets were collected.

The questionnaire was included following terms: demographic attributes, communication with different generations, marital state, sexual life, wanted number of children, background, EPSI (Erikson psychosocial stage inventory) , personality of averting tendency, sympathetic experience, opinion on the generation succession. Comparison between EPSI high-scored group and low-scored group revealed that the high EPSI group had high wanted number of children, positive opinion on generation succession, etc.

Key Words: decreased fertility, generativity, EPSI, wanted number of children, generation succession

I　研究の目的

我々は、少子化を狭義の生殖の問題と考えるだけでは根本的解決に至らないと考え、世代継承の視点から、個人および社会の「養育性」に注目してきた。平成12年度は文献的研究[1)]を行い、平成13年度は「養育性」の測定手段として、オーストラリアのRosenthalら（1981）が開発し、中西らが改訂した日本語版EPSI（エリクソン心理社会的段階目録検査 Erikson psychosocial stage inventory）を取り入れた調査票を試作し、小集団においてその有用性を検証した[2) 3)]。これらの研究成果から次の仮説を得た。

1.全体のバランスのとれた人格の成熟が次世代を育成しようとする力を生み出す。

2.多様な他者に関わり世話を受ける経験が、次世代を育成しようとする人格の発達を促す。

本年は調査対象を広げてこれらの仮説を検討し、少子社会における次世代の育成を促進するために、望ましい家庭・地域・社会環境を実現する方策について提言する。

II　研究方法及び対象

オンライン調査業者を通じ，25～54歳の男女モニター2,900人にEメールによる依頼文を送り，インターネット経由で回答を得た。2,900人は、全国364,883人（2002年10月1日時点）のモニター会員の中から年齢範囲を指定しランダムに選ばれた。性別・年齢層別6グループごとに先着およそ100名ずつを有効回答とした。集計対象は全体で男性317名・女性318名の計635名で、年齢層別グループ人数の内訳は表1の通りである。

対象の居住地は、表2に示すごとく全国各地に渡っている。

調査時期は2002年10月であった。

調査内容は、前年度調査票を検討した結果、そのまま使用することとしたので、詳細は文献1）を参照されたい。なお、ウェブ上の設問は不明・無回答が生じないように設計されていた点が、前年の質問紙調査と異なるところである。

表1.　対象内訳

	25～34歳	35～44歳	45～54歳	合計
男性	104	107	106	317
女性	107	104	107	318
合計	211	211	213	635

表2.　対象の居住地

	N	%		N	%
1北海道	22	3.5	25滋賀県	6	0.9
2青森県	2	0.3	26京都府	23	3.6
3岩手県	3	0.5	27大阪府	55	8.7
4宮城県	8	1.3	28兵庫県	32	5.0
5秋田県	3	0.5	29奈良県	6	0.9
6山形県	0	0.0	30和歌山県	3	0.5
7福島県	5	0.8	31鳥取県	1	0.2
8茨城県	11	1.7	32島根県	2	0.3
9栃木県	5	0.8	33岡山県	4	0.6
10群馬県	4	0.6	34広島県	14	2.2
11埼玉県	55	8.7	35山口県	6	0.9
12千葉県	31	4.9	36徳島県	4	0.6
13東京都	132	20.8	37香川県	2	0.3
14神奈川県	64	10.1	38愛媛県	3	0.5
15新潟県	7	1.1	39高知県	1	0.2
16富山県	4	0.6	40福岡県	14	2.2
17石川県	6	0.9	41佐賀県	2	0.3
18福井県	0	0.0	42長崎県	2	0.3
19山梨県	2	0.3	43熊本県	6	0.9
20長野県	12	1.9	44大分県	2	0.3
21岐阜県	7	1.1	45宮崎県	1	0.2
22静岡県	12	1.9	46鹿児島県	4	0.6
23愛知県	41	6.5	47沖縄県	1	0.2
24三重県	5	0.8	計	635	100.

III. 結　果

はじめに、サンプル全体の属性について、我が国の標準値に最も近いと考えられる資料と対照しながら示し、ついで、EPSI得点の性別・年齢層別検討、EPSI得点の高い群と低い群の比較を行った。

1.全体のプロフィール(属性など)

（1）学歴

男性は大学卒54％・高校卒21％・専門・専修13％、女性は大学卒31％・高校卒26％・短大・高専23％であった。各世代が18歳であった時点の全国の大学進学率を文部科学省「学校基本調査報告」でみると[4)]、男性は30歳35.2％・40歳41.3％・50歳29.1％、女性は30歳37.4％・40歳33.3％・50歳17.7％となっており、本調査の対象の学歴はやや高めと言える。特に45～54歳群の男性は大学卒･大学院卒あわせて71.7％、女性は35.5％とこの年齢層としては高い学歴を持つ者が多い。

（2）職業

常勤の勤め人が45％、非常勤・パート勤務が12％。女性の半数が専業主婦であった。総務省統計局「労働力調査」によれば、2001年の女子労働力人口比率は、最も低い30～34歳で58.8％、最も高い45～49歳は72.7％となっているので、対象の専業主婦率はやや高いと言えよう。

（3）同居関係

68％が配偶者と同居しており、53％に子どもがある。未婚は26％で、13％が一人暮らしである。2000年の国勢調査（総務省統計局）によれば、15歳以上の未婚率は男性31.8％・女性23.7％であった。

（4）未婚者の結婚の意思

60％が「結婚したい」、23％は「パートナーなら欲しい」、5％は「配偶者・パートナーのいずれもいらない」と答えている。25～34歳の未婚者では、70％が「結婚したい」と答えているが、21％は「パートナーなら欲しい」、3％が「配偶者・パートナーのいずれもいらない」と答えている。

第11回出生力動向基本調査（1997年）で行われた独身者調査（18歳以上50歳未満）では、「いずれ結婚するつもり」は男性85.9％・女性89.1％、「一生結婚するつもりはない」は男性6.3％・女性4.9％であった[3]。

（5）既婚者の性生活

「普通にある」43％、「あまりない」41％、「ない」16％であった。25～34歳の既婚者では、「普通にある」56％、「あまりない」36％、「ない」8％である。朝日新聞社調査「夫婦の性1000人に聞く」（2002年）[4]によれば、セックスレスの定義を「年に数回程度」および「この1年全くない」とした上で、20~50代のセックスレス夫婦は28％、30代では26％であった。

（6）子どもの数

子どものいる人の平均子ども数は1.93人であった。全体の希望子ども数の平均値も1.93人であり、希望子ども数の年齢層別有意差はなかった。

2001年「国民生活基礎調査」（厚生労働省大臣官房統計情報部）[3]によれば、児童のいる世帯の平均児童数1.75人であり、第11回出生力動向基本調査（1997年）によれば、既婚者の理想子ども数は2.53人、独身者の希望子ども数は2.13人となっている。

2. 男女・年齢層別EPSI得点平均値

EPSI得点は「全く当てはまらない」～「とてもよくあてはまる」の5件法（0～4点）で算出した。56項目中32項目は逆転項目であるので、「全く当てはまらない」から「とてもよくあてはまる」を4～0点で算出した（付表19）。表3に男女年齢層別EPSI平均得点を示した。これを文献3）のプロフィール用紙を使用してプロットしたものが、図1.2.である。

女性は、親密性と統合性を除いて、年齢層が高い程各得点が高くなっており、合計得点も年齢に従って高くなっている。一方男性は、35～44歳群が最も低い項目が多く（信頼性、自主性、同一性、親密性、統合性）、合計得点が男性で最も低い。

合計点でみると、男性25～34歳群は125.71と女性の35～44歳群125.45に近く、男性35～44歳群のEPSI得点122.65は女性の25～34歳群121.05に近いという、逆転の結果が特徴的である。

そこで、年齢を5歳きざみで男性のEPSI平均得点をみると、30～34歳群の得点131.64と高く、これが男性25～34歳群の得点を上げていることが分かった。

表3.EPSI平均得点

	男性			女性		
	25～歳	35～歳	45～歳	25～歳	35～歳	45～歳
信頼性	13.57	13.36	14.09	14.64	15.38	15.37
自律性	16.13	16.36	17.25	15.91	16.66	17.51
自主性	15.79	15.25	16.23	14.39	15.20	16.00
勤勉性	16.91	17.00	18.42	15.84	16.79	17.41
同一性	17.06	15.91	17.10	15.81	16.48	17.78
親密性	16.06	15.21	15.56	16.30	16.04	16.61
生殖性	14.30	14.53	15.09	12.46	13.60	14.36
統合性	15.89	15.04	15.75	15.69	15.31	15.94
合計	125.71	122.65	129.49	121.05	125.45	130.99

3.EPSI総合得点高低別検討

EPSI合計得点の高い方からおよそ30パーセンタイルを高得点群（139～199点）、低い方からおよそ30パーセンタイルを低得点群（24～114点）、その間を中間群（115～138点）と3群に分けて検討した。高得点群が207名、中間群が223名、低得点群が205名となった。性別年齢層別内訳は表4の通りである。

表4　EPSI得点群別対象内訳

	低得点群	中得点群	高得点群	計
男性25～34歳	37	30	37	104
男性35～44歳	40	35	32	107
男性45～54歳	31	36	39	106
女性25～34歳	42	38*	27**	107
女性35～44歳	31	43	30	104
女性45～54歳	24	41	42***	107
計	205	223	207	635

（検定基準=高得点群）危険率* <0.1、** <0.05、*** <0.01

図1 EPSI平均値プロフィール 男性・世代別

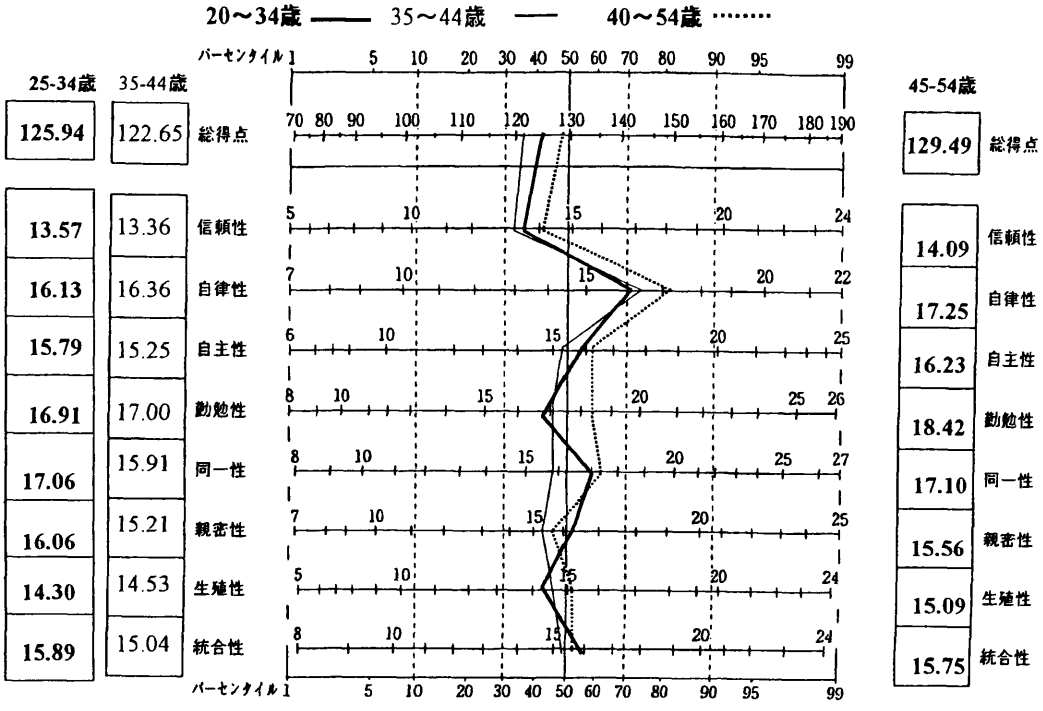
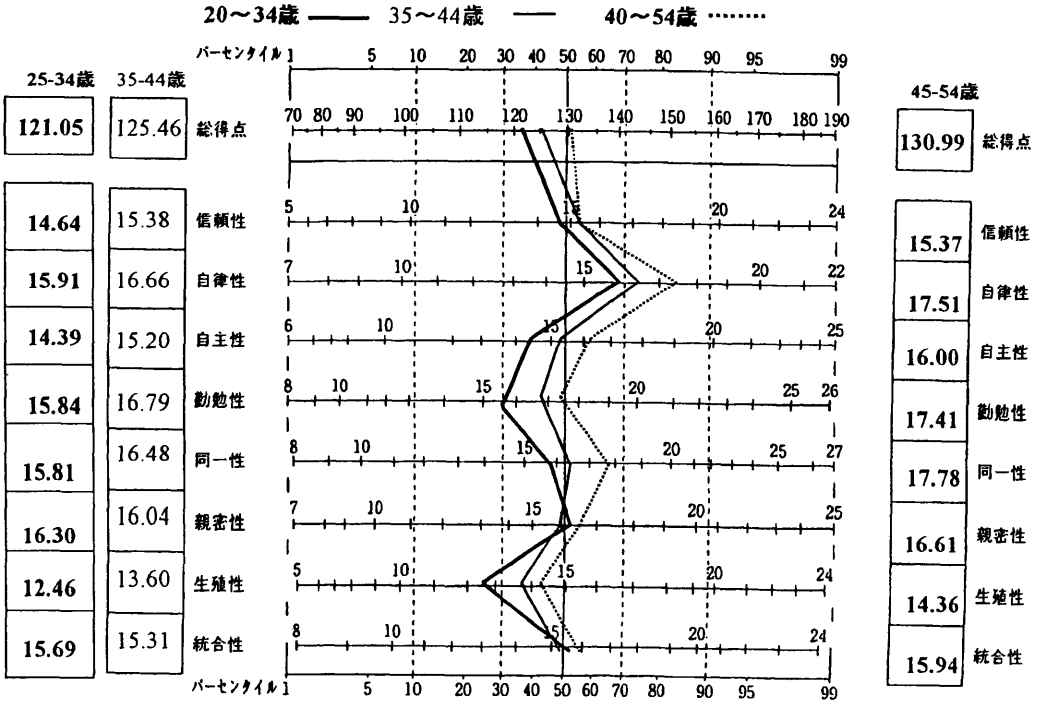
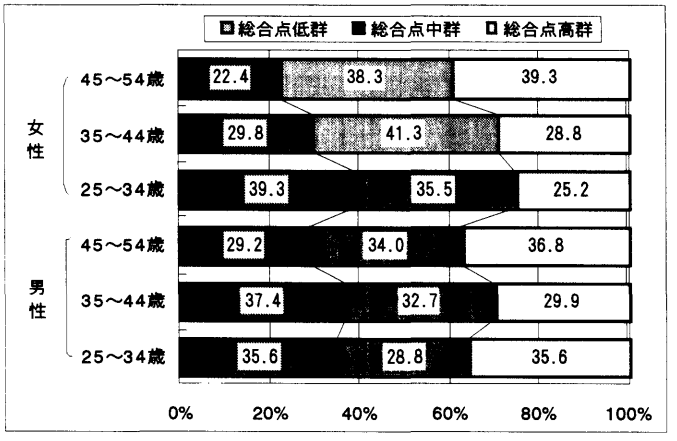


図2 EPSI平均値プロフィール 女性・世代別



年齢層別にみると、高得点群 207 人のうち 45～54 歳が男女合わせて 81 人（39.1％）と多いが、男性のみでは差はなく、女性に年齢による差があった。図３に示すように、女性は年齢が上がるにつれ高得点群の割合が増え、低得点群の割合が下がるが、男性は 35～44 歳群の高得点群の割合が最も低くなっている。

図３　性別・年齢層別 EPSI 得点群割合



以下では、高得点群 207 名と低得点群 205 名を比較し、有意な差が認められた項目について述べる。危険率を記さず「差がある」と記した場合は P<0.01 で差があったことを指す（付表１～20）。高得点群と低得点群でそれぞれ H 群・L 群と称し、性別・年齢層別の H 群・L 群比較の検討も加えた。なお文中、アンケート項目文を短縮してあるので、正しくは付表を参照されたい。

（１）属性

１）最終学歴

「高校卒」は H 群 17.4％・L 群 27.8％、「専門学校卒」は H 群 10.6％・L 群 19.0％、「大学卒」は H 群 49.3％・L 群 35.6％となっており、高校卒. 専門学校卒は L 群が高く（p<0.05）、大学卒は H 群の割合が高かった（付表３）。

性別で大学卒の割合を見ると、女性では有意差はなく、男性では H 群 61.1％・L 群 44.4％と、H 群の大学卒割合が高かった（P<0.05）。年齢層別では、45～54 歳で「大学卒」が多かった（H 群 60.5％・L 群 36.4％）。全体の高校卒 149 名・大学卒 268 名の EPSI 総合点平均値を算出すると、高校卒 121.5 点・大学卒 130.1 点となり有意な差が認められた。学歴の高い方が、EPSI 得点は高い傾向があった。

２）同居関係

「配偶者と同居」は H 群 75.4％・L 群 55.6％と H 群の割合が高い。「子どもと同居」は H 群 58.5％・L 群 42.0％、と H 群の割合が高い。すなわち、H 群の方が結婚して子どものいる人が多い（付表４）。

性別で見てもこの傾向は同じであった。年齢層別では、45～54 歳群に顕著な差がみとめられ、一人暮らしは L 群が多く（H 群 3.7％・L 群 27.3％）、配偶者と同居（H 群 88.9％・L 群 56.4％）、子どもと同居（H 群 77.8％・L 群 45.5％）は H 群の割合が高かった。35～44 歳群でも配偶者と同居（H 群 83.9％・L 群 64.8％）で危険率 p<0.05 で差が認められた。25～34 歳では有意差が認められていない。

すなわち、25～34 歳では配偶者・子どもの有無で、EPSI 得点に差が認められないが、35 歳以上では結婚して、子どものいる人の方が得点が高い傾向がある。

３）職業

職業では顕著な差は認められず、「主婦」の占める割合も H 群 24.2％・L 群 22.0％とほぼ同じであった。

職種では「事務」は、H 群 10.6％・L 群 18.5％と L 群の割合が高く（p<0.05）、「営業・販売」では H 群 14.5％・L 群 6.8％と H 群が高かった（付表５）。

性別で見ると、男性では「営業・販売」で H 群 24.1％・L 群 9.3％と H 群が高く、女性では「常勤」が、H 群 15.2％・L 群 26.8％と L 群の割合が高かった（p<0.05）。

年齢層別では差がなかった。

職業は全体では大きな差はみられなかったが、職種では営業・販売が事務系より H 群の割合が高い傾向と、常勤の女性に L 群が高い傾向が認められた。

（２）結婚・子ども

１）結婚

「結婚している」割合は H 群 74.9％・L 群 56.1％、「未婚」は H 群 20.3％・L 群 37.6％で、H 群の婚姻率が高い（付表７）。性別でも同じ結果で、男女それぞれで H 群の婚姻率が高かった。年齢層別では、35～44 歳群、45～54 歳群で同様に H 群の婚姻率が高かったが、25～34 歳では H 群 50.0％・L 群 45.6％で婚姻率に有意な差はなかった。

２）結婚の意思（未婚者限定）

未婚者（H 群 77 人・L 群 42 人）の結婚の意思をみると、「結婚したい」は H 群 85.7％・L 群 46.8％で H 群の割合が高く、「パートナーならほしい」は H 群 11.9％・L 群 31.2％で L 群が高くなっており、「一生妻または夫、パートナーはいらない」は H 群は 0％・L 群が 9.1％であった。以上から、未婚者は H 群の方が結婚に積極的であると言える（付表 7-SQ1）。

３）性生活（既婚者限定）

既婚者（H 群 115 人・L 群 188 人）の性生活については、「普通にある」が H 群 47.7％・L 群 31.3％と H 群の割合が高かった（付表 7-SQ2）。

4）希望子ども数

平均値で H 群 2.17 人・L 群 1.76 人と H 群の希望子ども数が多かった。性別、年齢層別にみても、H 群の希望子ども数が多い傾向が認められた。希望子ども数が最も多かったのは 45～54 歳の H 群で 2.30 人であった。（付表 8）。

（3）同世代・異世代との交流

1）世代間交流

異世代・同世代との交流について全体でみると、同世代との交流は多いが、上下の異世代とは低調である。その中で H 群が L 群に比べ「交流が多い」との回答で有意な差がみられたのは、「下の世代と」H 群 26.6％・L 群 18.0％（$p<0.05$）、「同世代と」H 群 90.8％・L 群 75.1％であった（付表 6）。

性別で見ると、男女共に H 群に「同世代」との交流が多かった（男性 H 群 88.0％・L 群 66.7％、女性 H 群 93.9％ ・L 群 84.5％：$p<0.05$）。男女で異なっていた点は、男性では「下の世代と」で H 群の交流が多く（H 群 29.6％・L 群 16.7％）、女性では「上の世代と」で H 群の交流が多かった（H 群 39.4％ ・L 群 24.7％）。

年齢別では「同世代」との交流で差が認められ、25～34 歳群で H 群 92.2％・L 群 73.4％、45～54 歳で H 群で 93.8％・L 群 65.5％と H 群の割合が高かった。

2）世話を受けたと感じる人

これまでに、誰から世話を受けて成長してきたと感じているかについて、マルチ・アンサーで設問したところ、H 群が選択した項目数が L 群にくらべて多く、H 群はより多くの人から世話を受けたと感じていることが分かった。

いずれの群も「母」から世話を受けたと答えた割合が最も高く H 群 95.7％・L 群 97.1％、次いで「父」H 群 84.5％・L 群 82.4％で両群の差はない。同様に、祖父母・親戚の人など、家族・親族に世話になったと感じている割合は、H 群・L 群間に差がなかった。

H 群の割合が有意に高かったのは、「同僚」H 群 29.0％・L 群 17.6％、「先輩」H 群 34.8％・L 群 22.4％、「上司」H 群 25.1％・L 群 16.1％（$p<0.05$）、「学校の先生」H 群 28.5％・L 群 19.5％（$p<0.05$）であった（付表 9）。

性別では、男性では「学校の先生」が H 群 27.8％・L 群 16.7％、「先輩」H 群 38.0％・L 群 24.1％で H 群の割合が高く（$p<0.05$）、女性では「同僚」H 群 33.3％・L 群 17.5％で H 群の割合が高かった。

年齢層別では若い世代の方が、多くの人に世話になったと答えており、25～34 歳群で全体と同じ傾向がみられ、「同僚」H 群 31.2％・L 群 12.7％、「先輩」H 群 42.2％・L 群 17.7％、「上司」H 群 32.8％・L 群 11.4％で H 群の割合が L 群より高かった。45～54 歳群では、「先輩」で H 群 34.6％・L 群 16.4％と H 群が高く、「きょうだい」で H 群 19.8％・L 群 38.2％ と L 群で高いという特徴がみられた。35～44 歳群では有意な差が認められなかった。

以上のように、世話になった対象については、家族・親族では H 群 L 群間に差がなく、家族以外の先生、先輩、などで差が認められた。

3）人生を教えてくれたと感じる人の延べ人数

「人生について重要なことを教えてくれた」と感じる人の人数の平均値は、H 群 5.03 人・L 群 4.00 人と H 群が多いが、有意な差ではなかった。標準偏差は H 群 8.16 人・L 群 8.07 人と値が高く、両群ともばらつきが大きかった（付表 10）。

性別・年齢層別では、25～34 歳群で H 群 6.05 人・L 群 2.88 人と H 群が多かった（$p<0.1$）が、その他には有意な差はなかった。

（3）育った家庭の環境について

1）育った家庭の雰囲気

H 群が L 群に比べて割合が高かった家庭の雰囲気は、「自由な話し合いがあった」H 群 44.4％・L 群 25.9％、「付き合いが開放的であった」H 群 39.1％・L 群 21.0％、「ユーモアと安らぎがあった」H 群 50.2％・L 群 31.2％となっていた。「批判的であった」「厳格で息苦しい雰囲気であった」では「いいえ」と否定する割合が高かった（$p<0.05$）（付表 11）。

性別でみると、男性では「厳格で息苦しい雰囲気」では有意な差がなかったが、他の項目では全体と同じ傾向が見られた。女性では「自由な話し合い」、「ユーモアと安らぎ」「批判的であった」で同傾向が認められた。

年齢層別では、25～34 歳群の全項目で全体集計と同じ傾向がみられた。35～44 歳群では「自由な話し合い」（$p<0.05$）、「ユーモアと安らぎ」でのみ有意な差が認められた。45～54 歳群では「ユーモアと安らぎ」「批判的であった」で同傾向が認めれた（$p<0.05$）。

このように、「ユーモアと安らぎがあった」は多くの群で H 群が「はい」と答えている割合が高く、家庭の雰囲気において不変の価値であることが示唆された。と同時に「ユーモアと安らぎがある」を年齢層別で見ると、25～34 歳 H 群 62.5％、35～44 歳 H 群 53.2％、

45～54 歳 H 群 38.3％と年齢が上がるにつれ割合が低くなっており、世代別に家庭の雰囲気に変化があることが分る。

2）両親の夫婦像

回答者が育てられていた頃の両親像について、H 群が L 群に比べて割合が高かった項目は、「価値観が共通していた」H 群 38.2％・L 群 26.8％（$p<0.05$）、「個性を尊重していた」H 群 45.4％・L 群 26.8％（$p<0.05$）であった（付表 12）。

性別でみると、女性では各項目とも有意な差はなく、男性で「価値観が共通していた」が H 群 42.6％・L 群 25.9％と H 群の割合が高かった。

年齢層別では、25～34 歳群で「個性を尊重していた」が H 群 50.0％・L 群 32.9％と、H 群の割合が高かった（$p<0.05$）。35～44 歳群では「価値観が共通していた」H 群 50.0％・L 群 23.9％と H 群の割合が高く、45～54 歳群では「個性を尊重していた」で「いいえ」と否定した割合 H 群 9.6％・L 群 23.2％と、L 群に多かった。

両親の夫婦像も前項の家庭の雰囲気と同じく、世代による違いが見られ、時代とともに「価値観の共通」から「個性の尊重」への流れが見える。それぞれの時代で、夫婦関係の子どもへの影響の変化が伺えた。

3）父の回答者（10 代の頃）への関わり方

回答者が中学生から 20 歳ころまで、父母が回答者にどのように関わっていたかを設問した。

父親について H 群が L 群に比べて割合が高かった項目は、「考えや感じていることに耳を傾けてくれた（以下、傾聴的と称す）」H 群 27.1％・L 群 13.2％、「気づかってくれた」H 群 55.6％・L 群 45.4％（$p<0.05$）、「父に尊重された」H 群 35.7％・L 群 14.1％であった（付表 13）。

性別でみて、H 群が L 群に比べて割合が高かった項目は、男性では「父に尊重された」H 群 28.7％・L 群 15.7％（$p<0.05$）、女性では「傾聴的」H 群 30.3％・L 群 10.3％、および「父に尊重された」H 群 43.4％・L 群 12.4％であった。性別で $p<0.1$ であるが、男性で「男らしくするようには」が H 群 15.7％・L 群 8.3％と、H 群の割合が L 群に比べて高くなっていることが特徴であったといえる。

年齢層別に見ると、25～34 歳群で「尊重された」H 群 32.8％・L 群 11.4％、35～44 歳群では「傾聴的」H 群 21.0％・L 群 5.6％と「尊重された」H 群 38.7％・L 群 11.3％、45～54 歳群では「傾聴的」H 群 28.4％・L 群 12.7％（$p<0.05$）が、H 群は L 群に比べて割合が高かった。

4）母の回答者（10 代の頃）への関わり方

母についても、父と同じ傾向が見られ、「傾聴的」H 群 51.7％・L 群 38.5％、「母に尊重された」H 群 44.0％・L 群 22.4％で、H 群は L 群に比べて割合が高かった（付表 14）。

性別にみると、男性では「傾聴的」H 群 50.9％・L 群 36.1％（$p<0.05$）、「尊重された」H 群 45.4％・L 群 22.2％で、H 群の割合が L 群に比べて高く。女性は「尊重された」H 群 42.4％・L 群 22.7％で H 群は L 群に比べて割合が高かった。

年齢層別では、すべての年齢層で「尊重された」が、H 群は L 群に比べて割合が高かった。その他の項目では、25～34 歳群で「傾聴的」H 群 71.9％・L 群 46.8％、45～54 歳群では「指示的」H 群 40.7％・L 群 21.8％（$p<0.05$）で、H 群は L 群に比べて割合が高かった。45～54 歳群では「気づかってくれた」H 群 18.3％・L 群 56.4％（$p<0.05$）で、L 群が H 群に比べて割合が高いという特徴がみられた。

このように、世代や性別によって家庭環境の EPSI 得点に影響を与える要因は異なっている。

（5）回避傾向

すべての項目で L 群の「あてはまる」と答えた割合が H 群に比べて高かった（付表 15 ・図 4）。

「悪くないのに非難される」H 群 15.0％・L 群 28.3％、「批判されると傷つきやすい」H 群 37.7％・L 群 73.7％、「人に近づかない」H 群 14.0％・L 群 43.9％、「恥をかくことがいや」H 群 9.7％・L 群 62.0％、「いつもと違ったことはやらない」H 群 6.8％・L 群 22.0％、すなわち、L 群の方が回避傾向が強い。特に「傷つきやすい」「恥かくことがいや」と答えた L 群の割合は 73.7％、62.0％と群を抜いて高かった。

性別に見ると、男性の「非難される」で有意な差がなかった（H 群 20.4％・L 群 29.6％）が、他の項目では男女ともすべて、L 群の回避傾向が強かった。

年齢層別では、25～34 歳群では「非難される」H 群 17.2％・L 群 27.8％で有意な差がなかった。

性別・年齢層別にみても L 群の回避傾向は強かった。特に「恥をかくことがいや」の両群の差が大きかった。

（6）共感体験

共感体験はすべての項目で H 群の「あてはまる」と答えた割合が L 群に比べて高かった（付表 16 ・図 5）。

「うれしくなる」H 群 84.5％・L 群 55.6％、「腹が立つ」H 群 76.3％・L 群 62.9％、「もらい泣きした」H 群 74.9％・L 群 57.6％、「感動して涙が出た」H 群 91.3％・L 群 81.5％、「つらさを感じ取った」H 群

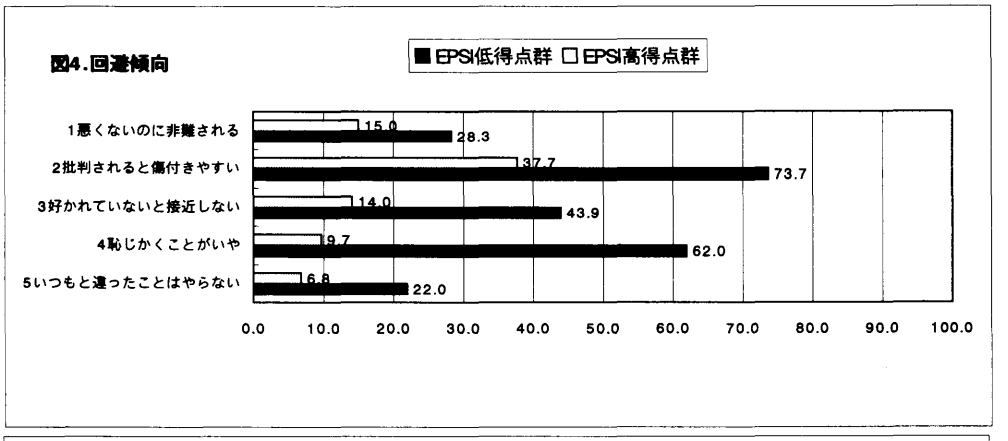


図4.回避傾向
■EPSI低得点群 □EPSI高得点群
1悪くないのに非難される
15.0
28.3
2批判されると傷付きやすい
37.7
73.7
3好かれていないと接近しない
14.0
43.9
4恥じかくことがいや
9.7
62.0
5いつもと違ったことはやらない
6.8
22.0
0.0 10.0 20.0 30.0 40.0 50.0 60.0 70.0 80.0 90.0 100.0

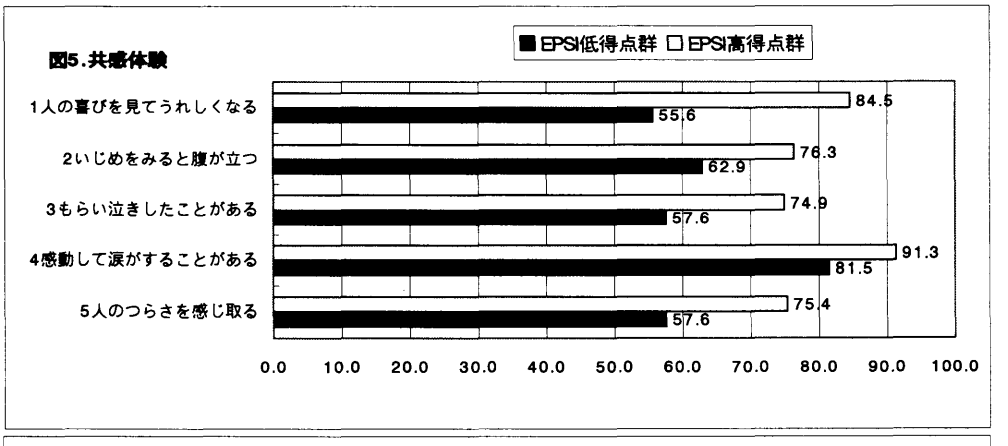


図5.共感体験
■EPSI低得点群 □EPSI高得点群
1人の喜びを見てうれしくなる
84.5
55.6
2いじめをみると腹が立つ
76.3
62.9
3もらい泣きしたことがある
74.9
57.6
4感動して涙がすることがある
91.3
81.5
5人のつらさを感じ取る
75.4
57.6
0.0 10.0 20.0 30.0 40.0 50.0 60.0 70.0 80.0 90.0 100.0

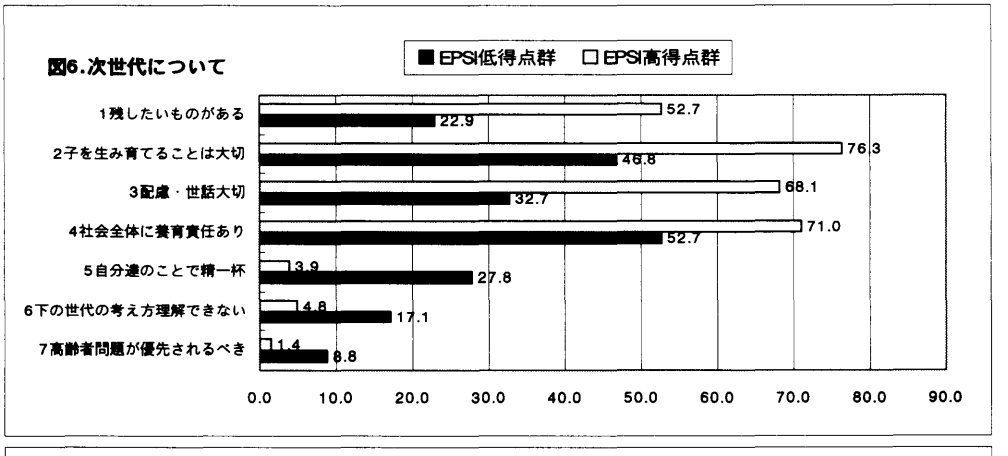


図6.次世代について
■EPSI低得点群 □EPSI高得点群
1残したいものがある
52.7
22.9
2子を生み育てることは大切
76.3
46.8
3配慮・世話大切
68.1
32.7
4社会全体に養育責任あり
71.0
52.7
5自分達のことで精一杯
3.9
27.8
6下の世代の考え方理解できない
4.8
17.1
7高齢者問題が優先されるべき
1.4
8.8
0.0 10.0 20.0 30.0 40.0 50.0 60.0 70.0 80.0 90.0

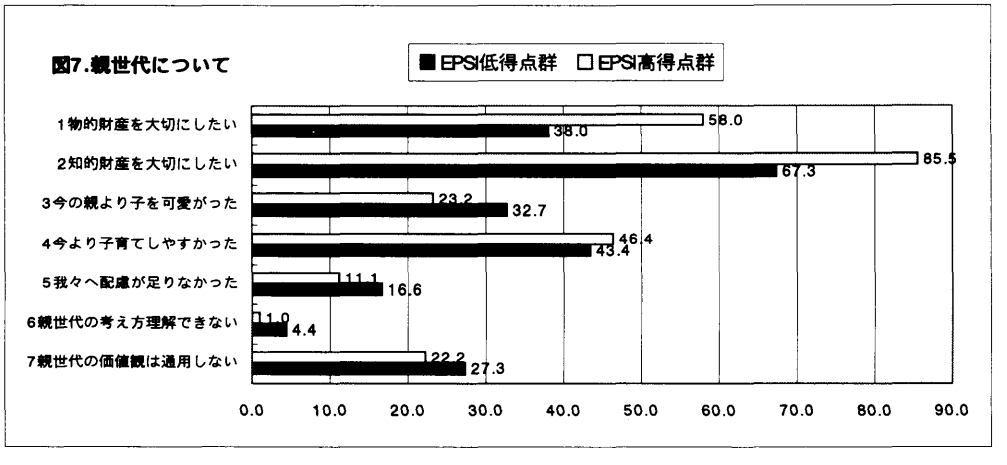


図7.親世代について
■EPSI低得点群 □EPSI高得点群
1物的財産を大切にしたい
58.0
38.0
2知的財産を大切にしたい
85.5
67.3
3今の親より子を可愛がった
23.2
32.7
4今より子育てしやすかった
46.4
43.4
5我々へ配慮が足りなかった
11.1
16.6
6親世代の考え方理解できない
1.0
4.4
7親世代の価値観は通用しない
22.2
27.3
0.0 10.0 20.0 30.0 40.0 50.0 60.0 70.0 80.0 90.0

75.4％・L群57.6％となっていた。

性別に見ても、すべての項目でH群の「あてはまる」と答えた割合が高かった。

年齢層別では、「うれしくなる」が全年齢層で差があった。45～54歳では全項目で差があった。

H群はL群に比べ共感体験が多く、共感性が高いと言えよう。なかでも、人の喜びを感じ取り自分も「うれしくなる」という共感体験における差が顕著であり、特に意味があると思われる結果であった。

（7）世代継承観

1）次世代について

次世代については、H群の方がL群に比べて、次世代のことを考え責任を感じていた。「次世代に残したいものがある」H群52.7％・L群22.9％、「子どもを生み育てることは大切」H群76.3％・L群46.8％、「次世代への配慮や世話が大切」H群68.1％・L群32.7％、「社会全体に養育責任あり」H群71.0％・L群52.7％で、H群の割合がL群に比べて高かった。一方、L群は割合が高かった項目は、「自分達の事で精一杯」H群3.9％・L群27.8％、「若い世代の考え方が理解できない」H群4.8％・L群17.1％、「高齢者問題が優先」H群1.4％・L群8.8％である（付表17・図6）。

性別でも、H群とL群の違いは同じ傾向であった。

年齢層別では、35～44歳群で「社会全体に養育責任あり」に有意差がなかった(H群67.7％・L群56.3％)。

次世代についてどれ位配慮しているかは、年齢や性別より、EPSI得点の高低の影響が大きいと言えよう。

2）親世代について

H群の方がL群に比べて、親世代から受け継ぐものを大切にしようと考えていた。「物的財産を大切にしたい」H群58.0％・L群38.0％、「知的財産を大切にしたい」H群85.5％・L群67.3％で、H群の割合が高かった。一方、「今の親より子どもを可愛がった」はH群23.2％・L群32.7％でL群の割合が高かった（$P<0.05$）。「上の世代の考え方が理解できない」は全体で2.4％と少なく、差があるとは言えないであろう（H群1.0％・L群4.4％）（付表18・図7）。

性別に見ると女性では「物的財産を大切にしたい」でH群・L群の差が小さかった（$p<0.1$）。

年齢層別で、明らかな差がみられあたのは35～44歳群の「物的財産を大切にしたい」H群62.9％・L群33.8％のみで、他はH群・L群の差が$p<0.05$と小さくなっていた。

（8）H群・L群別EPSI得点

EPSI56項目の各平均値すべてにおいてH群がL群に比べ、高かった。また、発達課題ごと7項目ずつの8設問群（信頼性、自律性、自主性、勤勉性、同一性、親密性、生殖性、統合性）それぞれ合計得点においてもすべてでH群が高かった（付表20）。すなわち、EPSI総合得点の差は、一部の項目や一部の発達課題の得点差に由来するものではなく、全般的な差である。表5に示すように、各発達課題間の相関は高く、個人でみれば、H群に属する人は多くの発達課題を高いレベルまでクリアしているということになろう。（付表19）

（9）小括

H群はL群に比べて、以下の特徴が認められた

1.希望子ども数が多い。

2.世代継承への意識が高い。

これらから、EPSI得点の高い群すなわち、エリクソンの発達理論による人格の成熟度が高い程、次世代育成力があるといえ、仮説1「人格の全体的な成熟が次世代を育成しようとする力を生み出す」は支持されたといえる。

その背景として、H群はL群に比べて、

1.既婚・子どもありが多い。

2.既婚の場合、性生活が普通にあるが多い。

3.未婚の場合、結婚志向が強い。

表5.EPSI項目相関表

	総合計	信頼性	自律性	自主性	勤勉性	同一性	親密性	生殖性	統合性
総合計	1.000								
信頼性	0.740	1.000							
自律性	0.819	0.559	1.000						
自主性	0.821	0.513	0.722	1.000					
勤勉性	0.795	0.455	0.603	0.648	1.000				
同一性	0.870	0.597	0.674	0.675	0.656	1.000			
親密性	0.760	0.572	0.541	0.561	0.511	0.593	1.000		
生殖性	0.764	0.474	0.542	0.583	0.660	0.572	0.529	1.000	
統合性	0.768	0.565	0.536	0.515	0.506	0.695	0.526	0.497	1.000

4.共感性が高い。
5.回避傾向が低い（→親和性が高い）
6.同世代・異世代の人々との交流が多い。
7.世話になったと思う対象が多い。
8.育った家庭の雰囲気は、自由、開放的、ユーモアと安らぎがあった。
9.両親像は、価値観が共通、互いの個性を尊重していた。
10.父の接し方は、気づかい、傾聴的で、尊重してくれた。母は、傾聴的・尊重してくれたが多い。

以上から、仮説２「多様な他者に関わり世話を受ける環境が、次世代を育成しようとする人格の発達を促す」は支持されるといえよう。

Ⅳ考　察

少子化はリプロダクションの低下と言い換えられるが、リプロダクションとは世代の再生であり、継承であるから、出生率の低下のみに目を奪われるのではなく、世代継承の質的側面にも、注目すべきであると考えた。また、識者によって、若者の成熟遅延が語られることが多いが、これが少子化の背景としてなんらかの意義を有するのではないかとの仮説を立てた。成熟の指標として、エリクソンの漸成図式が有効でないかと考え、これを点数化したEPSI（エリクソン心理社会的段階目録検査 Erikson psychosocial stage inventory）を中心として、調査票を考案し、アンケート調査を行った。その結果、EPSIの総得点のみならず、個々の因子の得点も、家族形成、子産み・子育て意欲に、ほとんどすべて正に関わりがあることが示された。

この調査の示すところを考察すると、少子化の解決には、若い世代のバランスのとれた人格形成、家族関係をはじめとする世代を超えた人間関係の構築が必須である。

人間の生存領域を、（公的）生産領域と（私的）再生産領域とするならば、わが国の現状は、生産領域が再生産領域を侵食していると考えられ、再生産領域の再建を考える必要があろう。再生産領域の再建には、社会体制を柔軟化し、再生産領域を補強することによって、個人の再生産能力を高められることが今回の調査結果から示唆された。

平成13年度の厚生労働白書[7]の標題に「生涯にわたり個人の自立を支援する」とあるが、個人の自立を支援するには、経済基盤のみならず人格の発達を支援する視点が必要である。今回、年齢とEPSI得点が、常に正の関連にあるわけではないという結果が得られた。小データからコホート効果など論ずることはできないが、EPSI得点が様々なライフイベントなどに影響されることは容易に想像できる。その意味で、EPSIのような検査方法によって、個人のその時点におけるアイデンティティーの状態を把握することは、支援の際に役立つ一つの方法と言えよう。

Ⅴ結　論

EPSI得点の高いこと、すなわち人格的に成熟しバランスがとれていることが、次世代育成力を高めることを明らかにした。その発達促進には家庭環境、特に家庭の雰囲気、両親の関係、子どもへの接し方など家庭内の人間関係が重要であった。また家庭内のみならず、地域・学校・職場などにおける、同世代・異世代を含めた多彩な人間関係が人格の成熟に寄与していた。

従って、個人の次世代育成力の発達を促進するためには、豊かな人間関係の中で、バランスのとれた人格形成が必要である。わが国の成人世代の次世代育成力が低下していることが、少子化の原因であるとすれば、次の施策のさらなる推進が必要となろう。

1.家庭生活が子どもと大人にとって、安らぎの場となることを保障できるような社会体制、特に労働条件・地域環境などを整備する。

2.人格の発達、バランスのとれた人格形成の観点から、科学技術面重視の教育のあり方を見直し、情緒面・社交性などを重視する。

3.社会的な養育力を高めるために地域・職場環境を見直し、人格の生涯発達の観点から、あらゆる年齢層の個人に対する発達支援を行う。

文　献

1）宮原　忍, 他. 少子社会における個人および社会の養育力に関する母子保健学的研究（第一報）文献研究.日本子ども家庭総合研究所紀要. 2001；第37集： 87-115.
2）宮原　忍, 他. 少子社会における個人および社会の養育力に関する母子保健学的研究（第二報）次世代育成に関するアンケート調査調査. 日本子ども家庭総合研究所紀要, 2002；第38集： 151-163.
3）中西信男・佐方哲彦. EPSI－エリクソン心理社会的段階目録検査－.上里一郎監修.心理アセスメントハンドブック, 第２版. 2001.6；西村書店, 365-376,
4）日本子ども家庭総合研究所. 日本子ども資料年鑑 2003; 232.
5）国立社会保障・人口問題研究所. 第11回出生動向基本調査・結婚と出産に関する全国調査・独身者調査. 1998.
6）朝日新聞朝刊. 2002年７月４日
7）厚生省監修, 厚生労働白書 平成13年度版. ぎょうせい, 2001.9.

EPSI総得点高・低群別集計　　*** p<0.01　** p<0.05　* p<0.1

	高群(n=207)		低群(n=205)		
	実数	%	実数	%	検定
表1.回答者の性別					
男性	108	52.2	108	52.7	
女性	99	47.8	97	47.3	
表2.年齢					
平均・標準偏差(SD)	40.23	(SD 8.41)	37.68	(SD8.39)	***
表3最終学歴（または現学歴）					
1.中学	1	0.5	5	2.4	*
2.高校	36	17.4	57	27.8	**
3.専門・専修学校	22	10.6	39	19.0	**
4.短大・高専	28	13.5	22	10.7	
5.大学	102	49.3	73	35.6	***
6.大学院	17	8.2	8	3.9	*
7.その他	1	0.5	1	0.5	
表4.現在一緒に暮らしている人					
1.一人暮らし	23	11.1	35	17.1	*
2.配偶者と（パートナーと）	156	75.4	114	55.6	***
3.子どもと	121	58.5	86	42.0	***
4.親と	51	24.6	61	29.8	
5.祖父母と	4	1.9	3	1.5	
6.恋人と	2	1.0	1	0.5	
7.その他	6	2.9	14	6.8	*
表4－SQ1.子どもの数					
平均・標準偏差(SD)	1.97	(SD0.70)	1.95	(SD0.68)	
表5.職業					
1.勤め人（常勤）	91	44.0	102	49.8	
2.勤め人（非常勤・パート）	21	10.1	27	13.2	
3.自営業（農林漁業の自営を含む）	24	11.6	13	6.3	*
4.会社経営	6	2.9	3	1.5	
5.学生（就学中）	4	1.9	2	1.0	
6.専業主婦	50	24.2	45	22.0	
7.その他	11	5.3	13	6.3	
表5-SQ1.職種					
1.事務	22	10.6	38	18.5	**
2.製造	8	3.9	13	6.3	
3.営業・販売	30	14.5	14	6.8	**
4.サービス業	11	5.3	18	8.8	
5.専門職（看護職・医師・教員など）	11	5.3	13	6.3	
6.技術・研究職	25	12.1	27	13.2	
7.その他	5	2.4	6	2.9	

	高群(n=207)		低群(n=205)		
	実数	%	実数	%	検定
表6.世代交流					
表6-1.自分より２０歳以上、上の世代と					
1.交流が多い	72	34.8	55	26.8	*
2.交流が少ない	96	46.4	91	44.4	
3.ほとんどない	39	18.8	59	28.8	**
表6-2.自分より２０歳以上、下の世代と					
1.交流が多い	55	26.6	37	18.0	**
2.交流が少ない	82	39.6	88	42.9	
3.ほとんどない	70	33.8	80	39.0	
表6-3.自分と同じまたは、近い世代と					
1.交流が多い	188	90.8	154	75.1	***
2.交流が少ない	17	8.2	42	20.5	***
3.ほとんどない	2	1.0	9	4.4	
表7.結婚					
1.結婚している（配偶者またはパートナーがいる）	155	74.9	115	56.1	***
2.結婚していたが、離別した	9	4.3	11	5.4	
3.結婚していたが、死別した	1	0.5	2	1.0	
4.未婚	42	20.3	77	37.6	***
表7－SQ１.結婚の意思（未婚者限定）	(n=42)		(n=77)		
1.結婚する、または結婚したい（時期は問いません）	36	85.7	36	46.8	***
2.結婚はしたくないが、パートナーとなる異性が欲しい	5	11.9	24	31.2	**
3.一生、夫または妻・パートナーはいらない	0	0.0	7	9.1	
4.その他	1	2.4	10	13.0	
表7－SQ2.性生活（既婚者またはパートナーあり限定）	(n=155)		(n=115)		
1.普通にある	74	47.7	36	31.3	***
2.あまりない	63	40.3	58	50.4	
3.ない	18	11.6	21	18.3	
表8.欲しい子どもの数					
平均・標準偏差(SD)	2.17	(SD 0.88)	1.76	(SD 1.1)	***
表９.世話を受けて成長してきたと感じる人					
1.父	175	84.5	169	82.4	
2.母	198	95.7	199	97.1	
3.祖父	42	20.3	41	20.0	
4.祖母	82	39.6	67	32.7	
5.きょうだい	56	27.1	72	35.1	*
6.親戚の人	51	24.6	45	22.0	
7.学校の先生	59	28.5	40	19.5	**
8.保母やベビーシッター	3	1.4	3	1.5	
9.友人	106	51.2	86	42.0	*
10.同僚	60	29.0	36	17.6	***
11.先輩	72	34.8	46	22.4	***
12.上司	52	25.1	33	16.1	**
13.その他	9	4.3	9	4.4	
14.その他	1	0.5	0	0.0	
表10.人生を教えてくれた人					
平均・標準偏差(SD)	5.03	(SD 8.16)	4.00	(SD 8.07)	

	高群(n=207)		低群(n=205)		
	実数	%	実数	%	検定
表11.育った家庭の雰囲気					
表11-1.考えなど自由に話し合い、会話が豊かだった					
1.はい	92	44.4	53	25.9	***
2.いいえ	27	13.0	48	23.4	***
3.どちらともいえない	61	29.5	75	36.6	
表11-2.様々な人達と付き合いがあり、開放的であった					
1.はい	81	39.1	43	21.0	***
2.いいえ	33	15.9	57	27.8	***
3.どちらともいえない	66	31.9	76	37.1	
表11-3.批判的なことを言い合い、家族仲がよくなかった					
1.はい	17	8.2	29	14.1	*
2.いいえ	137	66.2	98	47.8	***
3.どちらともいえない	26	12.6	49	23.9	***
表11-4.ユーモアがあり、安らぎがあった					
1.はい	104	50.2	64	31.2	***
2.いいえ	17	8.2	38	18.5	***
3.どちらともいえない	59	28.5	74	36.1	*
表11-5.厳格で息苦しい雰囲気であった					
1.はい	24	11.6	27	13.2	
2.いいえ	114	55.1	92	44.9	**
3.どちらともいえない	42	20.3	57	27.8	*
表12.父母の夫婦像					
表12-1.困ったときに、たすけあい協力していた					
1.はい	128	61.8	113	55.1	
2.いいえ	19	9.2	27	13.2	
3.どちらともいえない	48	23.2	56	27.3	
表12-2.考えや価値観が共通していた					
1.はい	79	38.2	55	26.8	**
2.いいえ	41	19.8	57	27.8	*
3.どちらともいえない	75	36.2	84	41.0	
表12-3.お互いの考えや個性を尊重していた					
1.はい	94	45.4	70	34.1	**
2.いいえ	27	13.0	46	22.4	**
3.どちらともいえない	74	35.7	80	39.0	
表12-4.父が主導権をもっていた					
1.はい	110	53.1	115	56.1	
2.いいえ	31	15.0	32	15.6	
3.どちらともいえない	54	26.1	49	23.9	
表12-5.仲のよい夫婦だった					
1.はい	116	56.0	98	47.8	*
2.いいえ	19	9.2	27	13.2	
3.どちらともいえない	60	29.0	71	34.6	

	高群(n=207)		低群(n=205)		
	実数	%	実数	%	検定
表13.父について					
1.父は私に、なにを・どのようにすべきか、指示していた	42	20.3	39	19.0	
2.父は、私の考えや感じていることに耳を傾けてくれた	56	27.1	27	13.2	***
3.父は、私の行動に口をはさまないが、気づかってくれていた	115	55.6	93	45.4	**
4.私は父に「男らしく」または「女らしく」するように言われた	30	14.5	19	9.3	
5.私は父に、尊重されて育った	74	35.7	29	14.1	***
表14.母について					
1.母は私に、なにを・どのようにすべきか、指示していた	75	36.2	67	32.7	
2.母は、私の考えや感じていることに耳を傾けてくれた	107	51.7	79	38.5	***
3.母は、私の行動に口をはさまないが、気づかってくれていた	77	37.2	83	40.5	
4.私は母に「男らしく」または「女らしく」するように言われた	27	13.0	25	12.2	
5.私は母に、尊重されて育った	91	44.0	46	22.4	***
表15.回避傾向					
1.私は悪くないのに、周りから非難されたり、邪魔されたりすることがある	31	15.0	58	28.3	***
2.私は、人に批判されると傷付きやすい	78	37.7	151	73.7	***
3.私は相手に好かれている確信がないと、その人に近づかない	29	14.0	90	43.9	***
4.恥じをかくことがいやで、人前で積極的行動が出来ない	20	9.7	127	62.0	***
5.いつもと違ったことはやらない	14	6.8	45	22.0	***
表16.共感体験					
1.うれしそうにしている人をみると、自分もうれしくなることがある	175	84.5	114	55.6	***
2.誰かがいじめられているのを見ると、はらが立つ	158	76.3	129	62.9	***
3.悲しんでいる人をみて、もらい泣きしたことがある	155	74.9	118	57.6	***
4.物事に感動して、涙が出たことがある	189	91.3	167	81.5	***
5.つらい思いをしている人の話を聞き、そのつらさを感じ取ったことがある	156	75.4	118	57.6	***

	高群(n=207)		低群(n=205)		
	実数	%	実数	%	検定
表17.世代継承観（次世代へ）					
1.私は、次の世代に残したいものがある（有形無形含め）	109	52.7	47	22.9	***
2.私にとって、自分の子どもを生み育てることは、大切なことだ	158	76.3	96	46.8	***
3.私にとって、自分の子どもに限らず次世代のために配慮したり世話をすることは、大切なことだ	141	68.1	67	32.7	***
4.子どもは次の時代の担い手だから、社会全体がもっと養育に責任を持つべきだ	147	71.0	108	52.7	***
5.私は、自分達のことで精一杯で、次の世代のことを配慮する余裕がない	8	3.9	57	27.8	***
6.私は、自分より下の世代や子ども世代の考え方が理解できない	10	4.8	35	17.1	***
7.現代は、次世代の育成より、高齢者問題が優先されるべきである	3	1.4	18	8.8	
表18.世代継承観（親世代から）					
8.私は、親や上の世代から伝えられる（物的）財産を大切にしたい	120	58.0	78	38.0	***
9.私は、親や上の世代から伝えられる「知的財産」や「生活の知恵」を大切にしたい	177	85.5	138	67.3	***
10.私の親世代の方が、今の親より子どもを可愛がったと思う	48	23.2	67	32.7	**
11.私の親世代が若い時の方が、今より子育てしやすい環境だったと思う	96	46.4	89	43.4	
12.私の親世代は自分達のことで精一杯で、我々世代への配慮が足りなかったと思う	23	11.1	34	16.6	
13.私は、親や上の世代の考え方が理解できない	2	1.0	9	4.4	
14.新しい時代には、親世代の価値観は通用しないので、子どもは自分の価値観を作って行けばよい	46	22.2	56	27.3	

	高群(n=207)		低群(n=205)		
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	検定
表19.EPSI　(*逆転項目)					
信頼性					
1.*私に，もっと自分をコントロールする力があればよいと思う	1.92	0.99	0.84	0.85	***
2.*良いことは決して長続きしないと，私は思う	2.24	1.01	1.36	0.86	***
3. 私は，世間の人たちを信頼している	2.41	0.70	2.01	0.81	***
4. 周りの人々は，私のことをよく理解してくれている	2.67	0.67	1.97	0.73	***
5.*私には，何事も最悪の事態になるような気がしてくる	3.09	0.81	1.89	0.91	***
6. 世の中は，いつも自分にとってよい方向に向かってい	2.36	0.76	1.66	0.83	***
7.*周りの人たちは，私を理解してくれない	2.64	0.83	1.74	0.80	***
自律性					
8.*私は，何事にも優柔不断である	2.64	0.92	1.24	0.82	***
9.*私は，決断する力が弱い	2.76	0.90	1.23	0.85	***
10.*私は，自分という存在を恥ずかしく思っている	3.62	0.64	1.72	0.91	***
11. 私は，自分で選んだり決めたりするのが好きである	3.31	0.61	2.61	0.81	***
12.*私は，自分の判断に自信がない	2.81	0.74	1.48	0.78	***
13.*私は，この世の中でうまくやっていこうなどとは決して思わない	2.69	0.99	1.88	0.96	***
14. 私は，物事をありのままに受け入れることができる	2.76	0.65	2.32	0.80	***
自主性					
15.*私には，みんなが持っている能力が欠けているようである	2.65	0.75	1.38	0.70	***
16.*私は，誰か他の人がアイデアをだしてくれることをあてにしている	2.77	0.89	1.54	0.82	***
17. 私は，多くのことをこなせる精力的な人間である	2.67	0.68	1.76	0.85	***
18.*たとえ本当のことであっても，私は否定してしまうかもしれない	2.39	0.91	1.65	0.78	***
19.*私は，リーダーというよりも，むしろ後に従っていくほうの人間である	2.23	0.96	1.18	0.75	***
20.*私は，いろんなことに対して罪悪感を持っている	3.11	0.84	1.74	0.95	***
21. 私は，してはいけないことに対して，自分でコントロールできる	3.24	0.60	2.70	0.75	***
勤勉性					
22. 私は，いっしょうけんめいに仕事や勉強をする	3.11	0.61	2.38	0.80	***
23. 私は，自分が役に立つ人間であると思う	2.94	0.59	1.96	0.71	***
24. 私は，目的を達成しようとがんばっている	3.12	0.60	2.27	0.80	***
25. 私は，自分の仕事をうまくこなすことができる	3.08	0.56	2.34	0.76	***
26.*私は，物事を完成させるのが苦手である	2.73	0.74	1.65	0.75	***
27.*私は，のらりくらりしながら多くの時間をむだにしている	2.40	0.97	1.10	0.73	***
28.*私は，頭を使ったり，技術のいる事柄はあまり得意ではない	3.09	0.78	1.87	0.90	***

	高群(n=207)		低群(n=205)		
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	検定
同一性					
29. 私は, 自分が何になりたいのかをはっきりと考えている	2.71	0.90	1.75	0.91	***
30.*私は, 自分が混乱しているように感じている	3.10	0.89	1.41	0.84	***
31. 私は, 自分がどんな人間であるのかをよく知っている	3.13	0.51	2.46	0.84	***
32.*私は, 自分の人生をどのように生きたいかを自分で決められない	3.10	0.87	1.65	0.83	***
33.*私は, 自分のしていることを本当はわかっていない	3.14	0.80	1.65	0.85	***
34. 私は, 自分が好きだし,自分に誇りをもっている	3.15	0.66	1.99	0.86	***
35.*私には, 充実感がない	2.94	0.80	1.24	0.78	***
親密性					
36.*誰かに個人的な話をされると, 私は当惑してしまう	3.09	0.81	1.88	0.88	***
37. 私は, 特定の人と深いつきあいができる	3.18	0.71	2.53	0.89	***
38. 私は, あたたかく親切な人間である	3.01	0.61	2.28	0.82	***
39.*私は, もともと1人ぼっちである	2.62	1.11	1.39	0.89	***
40. 私は, 他の人たちと親密な関係を持てている	2.95	0.60	2.10	0.82	***
41.*私は, 他の人よりも目立つのを好まない	2.01	0.92	1.21	0.82	***
42.*私は, 他の人たちとなかなか親しくなれない	2.65	0.78	1.43	0.77	***
生殖性					
43. 私は, 後輩や部下のめんどうをよく見る	2.82	0.68	2.14	0.75	***
44. 私は, 将来に残すことのできる業績をあげつつある	2.11	0.91	1.35	0.91	***
45. 私は, よい親である(親になる)自信がある	2.66	0.75	1.66	0.89	***
46.*私は, 後輩や部下を指導するのが苦手である	2.51	0.86	1.29	0.76	***
47.*私は, 自分を甘やかすところがある	1.52	0.86	0.93	0.68	***
48.*私は, 親であること(親になること)が不安である	2.66	1.01	1.28	0.86	***
49. 私は, 未来を担う子どもたちを育てていきたいと思う	2.97	0.87	2.23	0.92	***
統合性					
50.*私は, 自分が死ぬことを考えると不安である	2.46	1.12	1.77	1.17	***
51. 私のこれまでの人生は, かけがえのないものだと思う	3.17	0.71	2.27	0.94	***
52.*私は, 生きがいをなくしてしまっている	3.29	0.77	1.54	0.87	***
53. 私は, 悔いのない人生を歩んでいる	2.71	0.85	1.61	0.89	***
54. 私は, 自分の死というものを受け入れることができる	2.67	1.02	2.30	1.07	***
55.*私には, もっと別の生き方があるのではないかと思	2.10	1.01	1.21	0.86	***
56.*私の人生は, 失敗の連続のように思う	2.92	0.94	1.40	0.82	***

表20.EPSI得点・発達課題別

信頼性（７項目合計）	17.33	2.64	11.47	3.16	***
自律性（７項目合計）	20.59	2.94	12.48	2.99	***
自主性（７項目合計）	19.05	2.74	11.95	2.75	***
勤勉性（７項目合計）	20.46	2.91	13.57	3.38	***
同一性（７項目合計）	21.26	3.06	12.15	3.54	***
親密性（７項目合計）	19.52	2.83	12.82	3.09	***
生殖性（７項目合計）	17.24	3.13	10.88	3.40	***
統合性（７項目合計）	19.33	3.34	12.10	3.16	***
総得点（５６項目）	154.78	12.98	97.42	16.17	***